

内科診断学 第3版

福井次矢, 奈良信雄(編)

地域医療機能推進機構本部総合診療顧問

徳田安春

標準的教科書でありながら、実践的な学習書

「医学」を意味する“Medicine”には、「内科」という意味もあります。将来専攻する基本領域にかかわらず、全ての医師には、“Medical Diagnosis”すなわち「内科診断学」の学習が勧められます。医学生や初期研修医にとっては、内科診断学は医療面接や診察法を行う基礎となる学問であり、各論的な症候学と合わせて、最も重要な臨床医学の学べき領域となります。

さらには、新しい内科専門研修を専攻する医師には、将来のサブスペシャリティー診療科の種類にかかわらず、総合(一般)内科的な知識の習得と経験が求められており、内科診断学は研修目標のコアとなるでしょう。また、総合診療専門研修を専攻する医師にとっても、病院総合や家庭医療のいずれを選択するにせよ、多くの内科系疾患の初期診断過程にかかわることから、内科診断学を学ぶことが必須です。

内科診断学を効果的に学ぶためには、内科の実習や研修で臨床経験を積むことに加え、まず本書のような標準的な教科書を利用することをお勧めします。第Ⅰ章「診断の考え方」では、基本的な診断の意義や論理に加え、Evidence-based Diagnosis や誤診に至る心理など最近のトピックが取り上げられています。そして第Ⅱ章「診察の進め方」では、医療面接法、部位別身体診察法、検査の計画と解釈、POMR(Problem Oriented Medical Record)による診療録の記載法の基本が網羅されています。

本書のコア部分であり、かつユニークで非常に

有用なものが第Ⅲ章「症候・病態編」です。それぞれの症候・病態の定義、患者の訴え方、頻度、病態生理、原因疾患の相対的頻度、診断の進め方としての医療面接、身体診察、診断のターニングポイント、必要なスクリーニング検査と確定診断法が、豊富な図表や実践的アルゴリズムとともに、理路整然と展開されています。

それぞれの症候・病態における原因疾患については、各症候の項目でユニークな二次元図が付いており、臨床的重要度(横軸)と疾患頻度(縦軸)の相対的な位置が一目でわかるような工夫がなされており、記憶に残りやすいでしょう。

第Ⅳ章「症例編」では、実例を用いた診断思考プロセスが示されており、内科診断の実践的なロジックを習得するのに役立ちます。「見逃してはならない疾患」の鑑別診断も含む診断仮説を立てて、正確な診断に到達する道筋が、最後のクリニカルパールとともに、明快に解説されています。

このように、本書は内科診断学の標準的教科書でありながら、実践的な学習ができるように工夫されており、医学生、研修医のみならず全ての医師にお勧めしたいと思います。



●B5/頁 1066/2016 年
定価：本体 9,500 円＋税
[ISBN978-4-260-02064-0]
医学書院 刊